

本日の学び:「その名はインマヌエル」 テキスト:マタイ1章22~25節

【理解の手がかりとして】

「それゆえ、わたしの主が御自ら、あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」(イザヤ 7:14)——この預言者イザヤの預言が、マタイ福音書1章23節で引用され、その実現が語られている。すなわち、イザヤの言う「しるし」とは、また生まれてくるインマヌエルと言う名の「男の子」は、マリアから生まれる「イエス」なのだ、ということ。今回は、そのマタイが引用する「インマヌエル預言」の前提たるイザヤの文脈を中心に展開する。

イザヤはどのような状況で、このインマヌエル預言をしたのか、そのことに思いを巡らしてみたい。預言者イザヤの初期の特徴と言えば、エルサレムの支配階級に対する批判、彼らによって虐げられている人々の人権の擁護であった。当時は東方にアッシリアという大国が台頭してきた時代であり、南北イスラエル両方とも最後の繁栄を謳歌していた時でもあった。

そうした中で、富める者はよりいっそう富み、そうでない者は没落していくのみ、つまり社会的格差がどんどん広がっていた。この「格差」の問題は、現代社会と同様である。そうした状況において、イザヤは人々の信仰姿勢(形式的な祭儀、見せかけだけの犠牲)や賄賂などを徹底して非難した。⇒イザヤ 1:11-13、23

このような激しい言葉から分かるように、イザヤは権力者の横暴と腐敗を見逃すことはできなかった。それは彼の信仰と正義感から来るものであった。

そして、そのような内政的な問題に加えて、ユダ王国(南イスラエル)は戦争の危機に直面する。シリア・エフライム戦争である。アッシリアに対抗しようと同盟を結んだアラムと北イスラエルが、ユダを脅してその同盟に組み入れようと仕掛けた戦争である。その当時のユダの王様は「アハズ」——アハズは同時代を生きた預言者イザヤの反対にもかかわらず、アッシリアの王に神殿の財宝を贈って援助を求め、それにより危機を脱した。彼はアッシリア王に会い、ダマスコにおける異教的祭壇を見てこれをユダに導入した人である。『アハズは…父祖ダビデと異なり、自分の神、主の目にかなう正しいことを行わなかった』(列王下 16:2)

イザヤは、神を信頼せずアッシリアの助けを求めたアハズ王に対し厳しく対決した。イザヤは言った。「それゆえ、見よ、主は大河の激流を、彼らの上に襲いかからせようとしておられる。すなわち、アッシリアの王とそのすべての栄光を。激流はどの川床も満たし、至るところで堤防を越え、ユダにみなぎり、首に達し、溢れ、押し流す。その広げた翼は、インマヌエルよ、あなたの国土を覆い尽くす」(8:7-8)。この預言のように、アッシリアはアハズの思惑など遙かに越えた力をもってユダを蹂躪することになる。これはアハズの神への背信に対する審判であった。

イザヤは軍事同盟のような人間的策略をまったく相手にしなかった。「戦略を練るがよい、だが、挫折する。決定するがよい、だが、実現することはない」(8:10)と言い、また「あなたたちはこの民が同盟と呼ぶものを、何一つ同盟と呼んではならない」(8:12)とも言っている。イザヤ 8章8節と10節に二度「インマヌエル(神が我らと共におられる)」が記されている。そこで私たちは「インマヌエル」という、親しく聞き覚えのあり、そして非常に温かな印象を覚えるこの言葉に対して、全く異なる側面があることを示される。それは「裁き」という厳しい側面である。イザヤの言う「インマヌエル」とは「神は、心から神を信頼する者と共にあり、神を信頼しない者を厳しく裁かれる」ということである。

さてアハズ王の悪しき決断によって、ユダはアッシリアに従属し、異教的祭儀を導入した。そしてその後、ヒゼキヤ王の治世になって、王はアッシリアの支配を逃れようと、今度はエジプトを頼りとして反乱を起こした(BC703)。しかしイザヤにとっては、このような政略は無益・無謀なものだった。イザヤはこう言う。「災いだ、

助けを求めてエジプトに下り、馬を支えとする者は、彼らは戦車の数が多く、騎兵の数がおびただしいことを頼りとし、イスラエルの聖なる方を仰がず、主を尋ね求めようとしな。しかし、主は知恵に富む方。災いをもたらし、御言葉を無に帰されることはない。立って、災いをもたらす者の家、悪を行う者に味方する者を攻められる。エジプト人は人であって、神ではない。その馬は肉なるものにすぎず、霊ではない。主が御手を伸ばされると、助けを与える者はつまずき、助けを受けている者は倒れ、皆共に滅びる。」(31:1-3)

人間はどの時代も、神ではない者を神のように崇めて、信頼することがある。それは人間的に危機的な状況であればあるほどそう。しかし間違っはならない。いかなる人間も、いかなる権威も、いかなる国家も、神にはなりえないことを。イザヤが私たちに伝えてくれるもの、それは神への揺るぎない信頼である。その信仰を保持するとき、歴史のどんな困難も耐えることが出来る、なぜなら、そこに神が共にいて下さるからだ、ということである。

さて、そのイザヤの活動の甲斐なく、ユダは敗北し、領土の大半を失い、かろうじてエルサレムだけが残った。そのような絶望的な状況がイザヤ書の冒頭(1章)に残されている。全てが終わろうとしている時に至って、しかしイザヤは全く麗しい幻を見ている。それが2章に記される「終末の平和」の幻である。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」(2:4)「その日には、人間の高ぶる目は低くされ、傲慢な者は卑しめられ、主はただひとり、高く上げられる。」(2:11)

ただ一人なる神を共に崇め、罪を悔い改め、互いに戦うことを止める、そんな究極の平和な世界を、イザヤは夢見た。そしてその幻は、現代の私たちの幻でもある。そしてその幻の実現が、神の独り子イエス・キリスト(インマヌエル)と共に始まり、その完成に向かう途上に今あると信じる。

インマヌエルなるイエス・キリストの降誕を待ち望むということは、第二の降誕、つまり終末における神の国の完成を待ち望むということでもある。そしてそれはイザヤの見た平和の幻の実現を待ち望むということ。イザヤの信仰に学び、どんな人間的困難の中にあっても、神以外のものを頼りとする事なく、神のみを信頼するものでありたい。そしてそのような信仰的視点に立ってこの世界を見、この世界の間違っているところを見極め、その悔い改めのために祈り、人々が神に立ち返ることを求めたい。

『聖書教育』より

「マタイ福音書は、…メシアの誕生の次第が旧約聖書の文脈を大切にしながら物語られています。…イエスは、…約束の地としての神の国へ人々を招き、…『自分の民を罪から救う』(マタイ 1:21)という使命を背負ってこの世に遣わされました。」(聖書の学び「旧約聖書と降誕」「イエスという名を背負って」)